

English Garden 第91話

"Americans should establish a dialogue with all sections of Japanese society."

Edwin O. Reischauer

「アメリカは日本の社会のあらゆる層の人々と対話をする必要がある」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの6回目です。表題の言葉は、1960年の安保闘争を分析したライシャワーの結論です。

話はその数年前にさかのぼります。1956年6月、エドウィンはいよいよ1年間の休暇が終わるので、ハル夫人との新婚旅行をかねた帰国の旅につきました。子ども連れの、船旅による世界一周旅行でした。父も妹も心から喜んでハルを歓迎し、亡くなった妻アドリエンの父も西海岸から車でやってきて「娘の後継ぎ」に満足してくれました。

エドウィンがハーバード燕京研究所長になって手がけた大きな仕事の一つに、ハーバードにおける韓国研究の発足があります。中国と日本の研究が進んでいるハーバードこそ、韓国研究を始めるべきであるとの信念に基づくものでした。しかし、韓国を専攻するためには、朝鮮語のほかに難解な中国語と日本語もマスターしなければなりません。その上、卒業後の就職先の見通しが立たないなど問題はいろいろありましたが、何とか発足にこぎつけました。この間に彼は、上下合わせて1800ページという教科書を書いています。"East Asia: The Great Tradition" (『東アジア 偉大な伝統』) と "East Asia: The Modern Transformation" (『東アジア 近代の変貌』) です。このとき、これまで使われていた "the Far East" (極東) に代って "East Asia" (東アジア) という呼び方を定着させました。「近東・中東・極東」という呼称は、あまりにヨーロッパ的な視点によるものだからです。



エドウィンはハーバードから日本に留学を希望する学生の斡旋をしたり、全米をまわって講演をしたり、忙しいながら東西理解の目的に邁進して充実した時を過ごしていました。

1960年夏、ハルを伴って日本に出張しました。久しぶりに見る日本はめざましい経済発展をとげ、「日本の奇跡」がすでに始まっていますが、5月から6月にかけて起こった日米安全保障条約の改定をめぐる大騒動の余燼がまだくすぶっていました。エドウィンは出発直前に季刊誌「フォーリン・アフェアーズ」からこの安保騒動についての論評を求められたので、実際に日本で各界の人々にインタビューをし、帰国後 "The Broken Dialogue" (損なわれた対話) という論文を発表しました。この中で氏は根底に流れる日本の左右両派の対立の状況を分析し、「これはアメリカと日本の反政府勢力との理解の不足によるもので、アメリカにとっての急務は日本社会のあらゆる層の人たちとの対話を持つことである」と結論づけています。

10月、夫妻は韓国を訪れました。過去の日本の圧政を憎む韓国人がハルにいやがらせをする懸念がありましたが、ハルはその対策として、その前の学期にハーバードで朝鮮語を学んでいたもので、暖かく迎えられました。ハル自身も実際に韓国が豊かな文化遺産を持ち、高い教養を身につけた人も多いのを知って、両国の関係を敬意と友情のあるものに変えるよう進んで努力するようになりました。

その秋アメリカではジョン・F・ケネディが大統領に当選しました。

ケネディが大統領になればライシャワーが駐日大使に選ばれるだろうとの噂は前からあったのですが、翌年1月の末になって、國務長官から正式に大使就任を要請されました。家に帰ってハルに話すと、彼女はその場に立ちすくんでしまったそうです。ハルは外交官を取り巻く社交界を嫌っており、外交官とだけは結婚したくないと思っていたのです。それに、日本人であるため、各界の指導者から低く見られるだろうとの心配もありました。

エドウィンもまた、日本に対する愛が深すぎるゆえに、自分はアメリカの代表として東京で働くのは不適任だろうと思いました。しかし、日米両国の基本的な利益と目標は合致しているのだから、日本への愛とアメリカへの忠誠は両立しようとの結論に達し、この任務から逃げるわけにはいかないと覚悟を決めたそうです。

ハルは、どうしても日本に行くなら、一人で行ってくださいとまで言っていました。が、「国のために引き受けてください」という子どもたちの願いに心を動かされました。さらに、まだほんの1週間前に聞いたばかりのケネディの就任演説の中の「国のために自分が何をなしうるかを問え」という言葉に強く励まされたということです。

このときエドウィンは50歳、ハーバード燕京研究所長として、研究に教育に全力を投入し、日本の学者と共同で「16世紀までの日本史」を日英両国語で書く話も決まっていた。まさに学者として円熟の時期でした。それをすべて断ち切って困難な政治の世界に身を投じようというのは、並々ならぬ決断であったらと思うられます。しかし、これまで「アメリカのアジア政策を批判してきた」者として、彼は日米関係を左右する立場で働けるチャンスを逃すことはできなかったのです。

(次回に続く)

参考文献:

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York, 1986
『ライシャワー自伝』エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンストソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。